

随想

第179回

今から約二百年前の十八世紀末、イギリスの経済学者マルサスは、その著書「人口論」で『人口は制限しなければ幾何級数的に増加するが、食糧は算術級数的にしか増加しないので、人口の伸びは食糧生産の伸びに規定される。』と唱えたことは良く知られております。

それに従って、貧困は一種の自然現象であって、社会制度の欠陥によるものではないとして、禁欲や早婚の禁止を説いており、これが「マルサス主義」といわれるものであります。さらに、人口増加の圧迫によって必然的にもたらされる生活の困難を救済する方法として、マルサス主義を一層進めて人工的制限法すなわち、産児制限の必要性を説く「新マルサス主義」

が出現いたしました。

わが国でも、戦後のベビーブームの頃、計画的な受胎調節を目標として「家族計画」という考え方が一般化し、あの有名なマーガレット・サンガーさんの熱心な指導による産児制限が推奨されました。

人類の歴史を振り返りますと、世界人口は、紀元元年の頃には二億五千万人位であったものが徐々に増加し、倍の



「マルサスの人口論」に想う ——人口減少時代を迎えて——

土岐市長

塚本保夫

の拡大により人口増加が進むとともに、工業生産力による経済力の拡大によって、世界中から食糧を輸入することができるようになりました。今では一億三千万人近い人口を有し「飽食の時代」といわれるまでになっておりますが、こんなことが未来永劫に続くという保証はどこにもありません。

欧米では、地下水くみ上げ

れます、わが国の食糧安全保障のための自給率向上は喫緊の課題であります。

本市では、農業振興と観光開発を目指して、濃南地区でグリーンツーリズムとかアグリツーリズムといわれる施策を構想し、健康で安全な活力ある高齢社会を構築したいと考えております。

おかげさまで、好評のうちに「バーデンパークSOGI」

による機械的灌漑により土壌の塩分が増加し、耕作困難農地が拡大しているといわれます。また、中国などでは経済成長の陰で農業の衰退による食糧不足が心配され、やがて地球規模での食糧不足は、水とエネルギーと共に、人類生存の基盤を揺るがす事態が懸念されております。

そうした中、カロリーベアスで食糧自給率四〇%といわ

ますと、あの栄華を誇った

ローマ帝国は、少子化によって衰退したともいわれますが、経済成長により文化的に発展し豊かになった社会では、一般的に少子化現象の傾向が見られるのも事実であります。時代の変遷とともにマルサスの人口論と現実のギャップがあるのも、また、事実であります。

一人の女性が一生に出産される子どもさんの数を表す合計特殊出生率は、二・〇八で人口は均衡が保たれるといわれますが、現在の日本は一・二九であり、百年後には日本の人口は半減するといわれ極めて深刻な状況であります。

ちなみに、東アジア各国におけるおとしの合計特殊出生率は、香港〇・九三、韓国一・一六、台湾一・一八、シンガポール一・二四と、いずれも日本より少ないことを申し添えながらも、出生率回復のため、お互いに真剣に考えたいものであります。